

◆◇認知症のある人と医師が手を携えてつくった

たぶん、世界で初めての本◆

この本を読むと、ケアマネジャーが「よかれ」と思って組み立てたサービスが認知症のある人を不幸にしてしまうのはなぜか、精神病院が認知症のある人を不幸にするのはなぜか、家族が疲れ果ててしまうのはなぜかが、霧が晴れたようにわかります。

その秘密、分かりました。

この本に出てくる15人の認知症のある人が、「医療の対象の患者」としてはなく、石原哲郎 doctor の adviser として登場するのです。

挿入の絵の中で、とくに感銘をうけたのは、トム・キッドウッドの「パーソン・センタード・ケア」を石原哲郎さんが、誰にも分かる2つの花の5枚の花びらとして表現した2枚です。次のページにご紹介します。

「名称は知っているけれど、実行するのは困難……。高尚なイメージで非常に難しい方法論。理念は唱えるけれど実行はしていない。そんなパーソン・センタード・

ケア。それが、ひとめで分かるというところが、とても大切な点です」とは、認知症の現場をよく知る専門家のことばです。

医師になって約20年。神経内科専門医、認知症専門医となり、パーソン・センタード・ケアも学び、ちょっと自信をもって診療できるようになった石原哲郎さん。2014年の日本認知症ケア学会で受賞作に選ばれたプロジェクトを、認知症当事者の丹野智文さんに「本人の立場でみてください」と渡しました。翌朝届いたメールに、石原さんは、「身体が固まりました。本当に衝撃を受け、どう考えたらいいかわからなくなりました」。

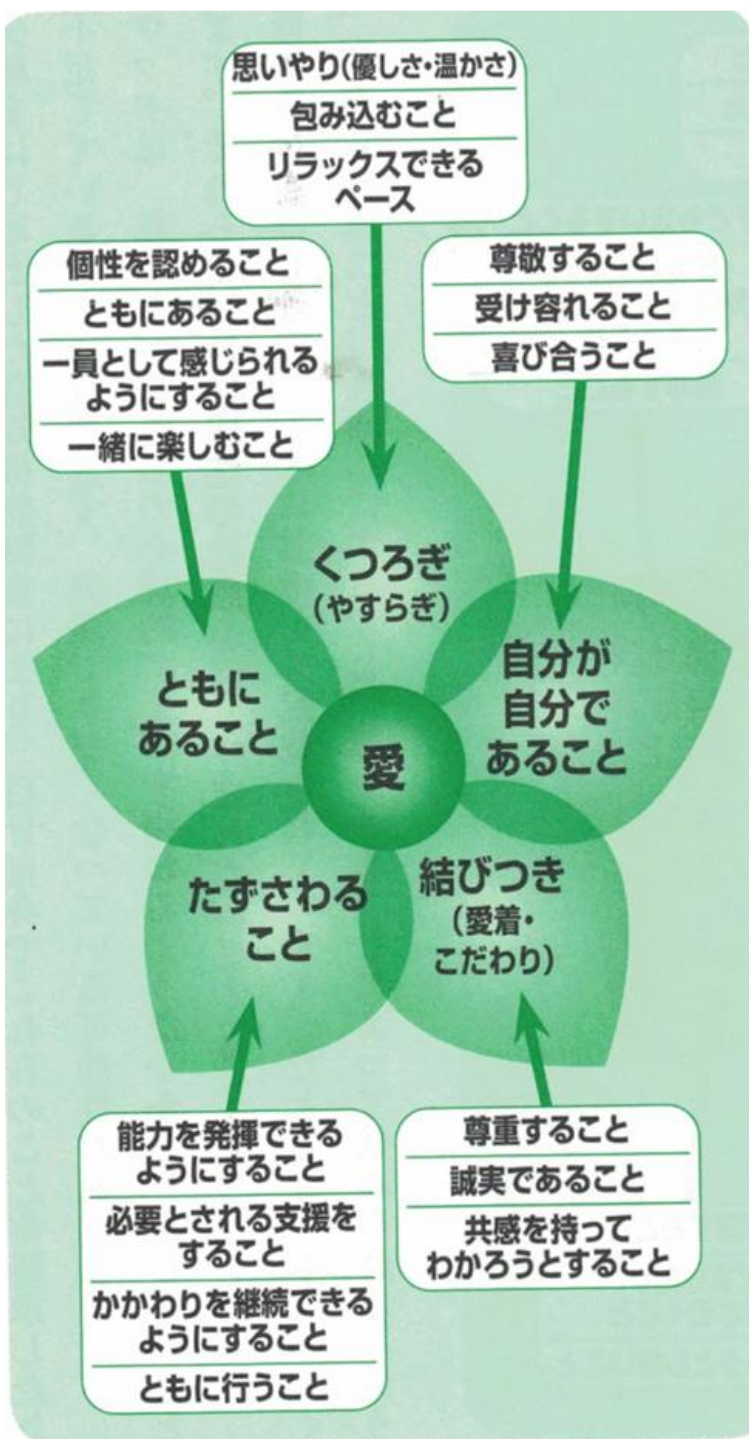
「この経験をきっかけに認知症の人とのかかわりについて根本から見直しました。」
そうして誕生したのがこの本です。

著者が認知症を経験した人々やまちづくり携わっている人々に学び、かつての自分のような落とし穴に落ちないように、と考え抜いた結晶がつまっています。2枚の図はそのエッセンスの一部です。



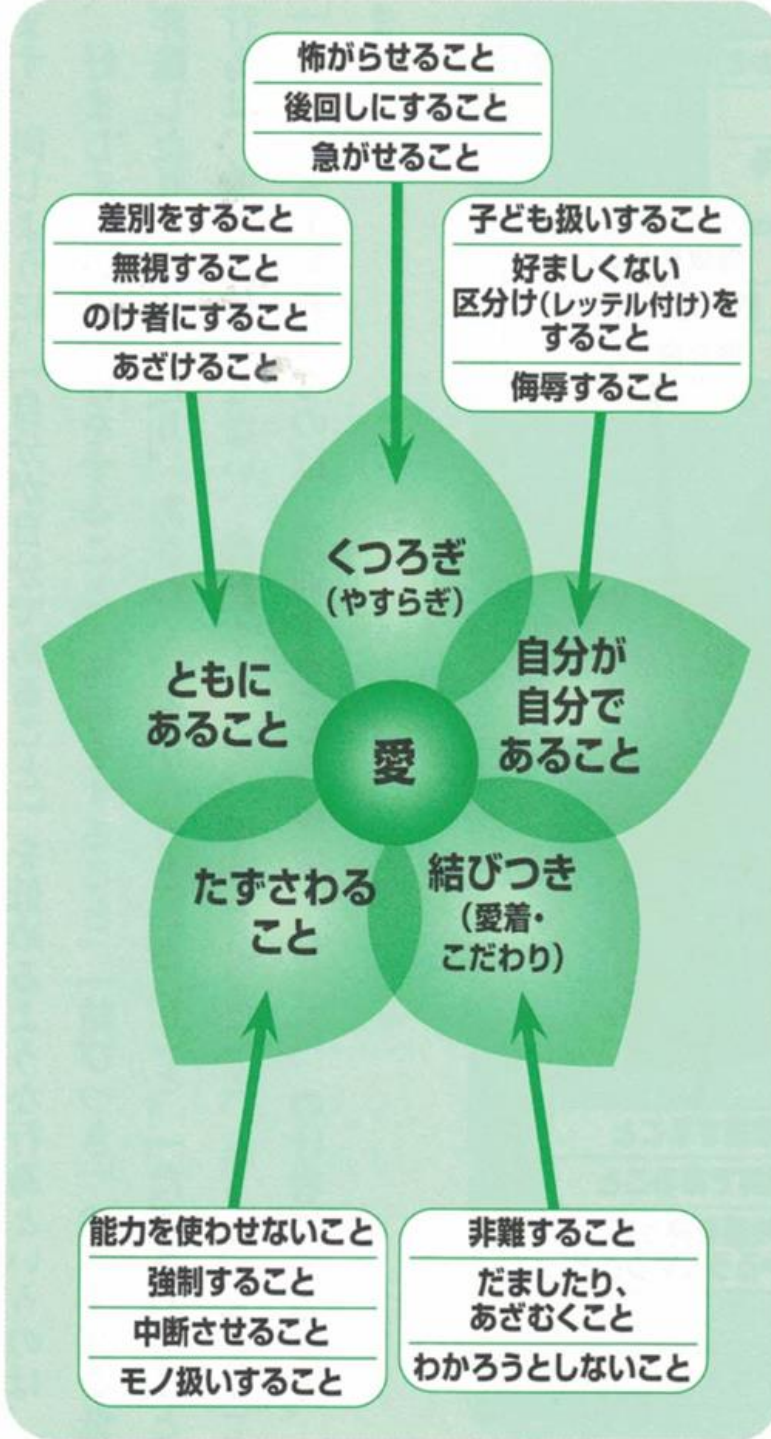
母は認知症でしたが、幸いなことに、BPSDに陥ることなく、機嫌よく95歳の天寿をまっとうしました。

私たちが、無意識のうちに、左側の図の5枚の花びらのように、母に接していたからかもしれません。5枚の花びらは、「母にとって大切」と思い、こころがけていた「誇り・味方・居場所」にも重なりました。



図表3-10.
個人を高める行為

出典：ドーン・ブルッカーなど「DCM(認知症ケアマッピング)理念と実践 第8版 日本語版 第2版」社会福祉法人仁至会認知症介護研究・研修大府センター、2011年、128～132ページを参考に作成



図表3-9.
個人を低める行為 [悪性の社会心理]

出典：ドーン・ブルッカーなど「DCM(認知症ケアマッピング)理念と実践 第8版 日本語版 第2版」社会福祉法人仁至会認知症介護研究・研修大府センター、2011年、28～32ページを参考に作成